昭和52年11月
論　集　第21号（商経編）別刷
札幌商科大学
札幌短期大学

≪山本安次郎『日本経営学五十年—回顧と展望』≫に関する書評的覚書

裴　富　吉

I

この覚書は，近著山本安次郎『日本経営学五十年——回顧と展望』(東洋経済新報社昭和52年4月)を，書評的に考察することを目的にする。その際に，特に私は，山本氏経営学説に加えた私なりの経営学的検討に，氏から私に返された反論をてこに，吟味を加えたい。その氏の反論をまず初めにそっくり引用・参照しておこう。

「西田哲学」によるといえば，とかく誤解され易い。いうまでもなく，経営学は経営の理論的研究であって，哲学と直接的に関係するものではなく，哲学をやったからとて経営学が推進されるものではない。ただ，経営学の学問的基礎を問題とし，その基礎を反省するとき哲学と交渉をもち，そのような経営哲学として「西田哲学」が極めて有効であることを説くのである。「西田哲学」そのもので経営学を説くのは本末転倒である。これまで西田哲学的思考方法が経営学の研究方法として有効であること，西田哲学の経営哲学的性格をあまり強調しすぎたきらいがあるかも知れない。そこから種々の誤解が生ずることともなる。著者の狙いは，あくまで経営を経営の現実に即して研究することである。このような西田哲学依存への誤解は，例えば，斐　富吉「書評　山本安次郎『経営学研究方法論』」札幌商科大学『論集』第17号（昭和51年5月）に見られる。斐　富吉氏は大学院時代から著者の見解に興味をもって来られたが，その時にも「西田哲学」を強調しすぎる見方をしていた。誤りというほかない〔200頁脚註，引用中の姓名のうち斐は裴が正しいので念のため〕。

この山本氏の私に対する，氏の経営学説の批判的吟味に返された反論的断定は，私にとって十分に理解しがたい論点を残す故，以下の叙述で何点かを取上げ，考えてみたい。

II

日本経営学会50周年を期して山本氏が本書『日本経営学五十年——回顧と展望』を上梓した努力は，同学に属する一員として大いなる賛美を捧げ，敬意を表しなければならない。しかし，同書が山本氏個人による著作・業績として編集され，日本の経営学50年史を回顧し，その上に日本経営学に展望を与え，さらには自己の経営学説の正当性を認証する方向性と，理論的妥当性とを高唱する形式で，とりまとめられているならば，私は，私自身に返された山本氏の反論を手がかりに，本書『日本経営学五十年——回顧と展望』を，山本氏の経営学説の構想の再論再説とみなし，考究する義務と責任があると感じている。

山本氏の経営学説の体系や主張に対して，私は，その具体的内容の理論展開は勿論のこと，加

うるに氏の経営学方法論の基礎構造に関心を抱く者である。山本氏にすれば，氏の狙いは「あくまで経営を経営の現実に即して研究することであ」り，「経営哲学として『西田哲学』が極めて有効である」との説明がある。また氏によれば，私のいくつかの論稿や書評での氏の経営学説に対する考究は，「西田哲学依存への誤解」故，「『西田哲学』を強調しすぎる見方をしており，誤りというほかない。」という基本点での反論・断定を，氏は提出している。ところが私は，まさにこの一点について諸種の疑念を，山本氏の経営学説の理論的方法論的主張にまつわる問題として，感得するのである。

「西田哲学」の思考方法を経営学の研究方法に有効と評価し，それを基礎理論で「経営哲学」として哲学の論理性のみを借用するだけという山本氏の，社会科学者としての思想営為の背景に関し，私はまずひとつの，私の理解の及ばない疑点を感じる。「西田哲学」を経営哲学として認知するなら，そこからその哲学の思考方法のみを純粋に要素的に分離・加工する手続をもって，経営学の方法論的思考方法に利用するとの解釈・説明そのものについて，私は不可解な社会科学者としての山本氏の存在に対する印象を，さけえない。一般に哲学とは，「人生の根本問題をもっぱら理性によって突きとめようとする学問である」，とされるが，この哲学から「人生の根本問題をもっぱら理性によって突きとめ」る手順は取残したままで，「理性によって突きとめようとする学問である」との側面だけを重点に，手続的には純粋培養的に「経営哲学」と持上げるのは僭称ではないかと考える。単に，哲学の中味から「思考方法」のみを抽出し，経営学の方法論的思考方法に転化・転用させるとの「思考方法」は，哲学を哲学たらしめる重要な他面の契機を喪失したそれへと変貌させている故，「○○哲学」とは呼称しがたい実質内容になりはしまいか。

哲学を何らかの形で，社会科学である経営学の方法論的基礎の支柱として活用をねらうのであれば，その哲学の哲学的学問的特質がその特定の社会科学にも反映・浸透するのは，ごく自然である。この要素・契機・側面の関連性は，とりあえず関係なしとして，その哲学の思考方法のみを利用・活用し，自己の社会科学理論の基礎に導入するというのは，換骨奪胎のきわみになろう。そこには，哲学の思考方法の経営学理論への応用はあっても，哲学の哲学たりうる思想的精神的な営為活動が欠落しており，いうなれば哲学の技術論的な咀嚼という期待はもてるものの，哲学の哲学本来のゆえんたるその営為活動を前提にしていない。とすると，その哲学の「哲学性」，西田哲学の「経営哲学」性とはもとより哲学という実体内容を放擲した「哲学」であり，もはや「哲学」という名称を冠しえない対象になる。はたして，こうした哲学の経営学への移入・適用の仕方は，哲学を哲学たらしめる足場を具備しうるであろうか。山本氏のいう経営哲学としての「西田哲学」とは，すでに哲学の資質を有しえない，単に思考方法である「西田哲学」の論理性だけを無断借用した「論理学」でしかない。これは哲学を「哲学」として生かす途自体を疑わせる事態を惹起させている。

Ⅲ

私が山本氏の経営学の研究方法論の基本問題に関し，次に疑問を感じるのは，私に対する反論の仕方である。

山本氏自からが，西田哲学的思考方法が経営学の研究方法として有効なこと，また西田哲学の経営哲学的性格に対しては氏の当初の意図以上の強調しすぎがあることを断りつつも，他者の種々の氏への誤解の原因がそこにある点を指摘しながらも，すなわち，氏自身がその誤解の「種」を蒔きながら，なおかつ裴　富吉の山本に対する理解は誤解であり，誤りであると批評する向きには，当事者として別に反駁が必要と判断している。私は，山本氏の経営学説の主張は，ある程度理解しているつもりであるが，しかしその経営学説の方法論的基礎にすえられている「西田哲学」という経営哲学の「経営の論理」としての適用形態に関しては，本覚書におけるⅡでの私の疑問点と関連して，氏自体の経営学説の理解については，氏と私とでは取上げ方がちがう，分析視座が全く異なる，との断りを入れておこう。このちがいが氏をして，私の理解を「誤解」といわしめた事由となったと考える。

つまり，私は「哲学」を経営学の方法論，基礎理論に附入する場合に，「哲学」の本来的性格が全的にその社会科学としての経営学の基本視点に，また問題意識に，経営学なりに反映・浸透する，ないしするはずと考える者である。それだからこそ，「哲学」の思考方法・論理性の側面のみを取入れ，採用・利用し，他の残りの「哲学」の思想的精神的営為の面を剝離させる思考上の手続を実施するというなら，その本元の「哲学」は移入された時点でもはや「哲学」の本性を欠く，それはただのその「哲学」の「論理」という骨組しか残存させない，無色透明の代物となる。したがって，このような手続を踏んだ「西田哲学」の論理性を研究方法に借りた経営学は「西田哲学」とは何ら根源的＝哲学的な関係を失なう。こうした「西田哲学」への対処法をもって，「西田哲学」の経営哲学的性格の格調の高さを評価する主張には，私は奇怪とさえ思える疑問をぬぐい切れないのである。

山本氏は，「西田哲学」に依拠するといった時の誤解の受けやすさを危惧しているようであるが，私はこの氏の懸念を熟知した上で，あえて氏の経営学説を西田哲学との関連を慮りながら，検討・吟味したのである。氏のいうように「誤解」との一言では片付けられない，氏の自己の経営学説が問題にする以前の論点を問題にするのである。氏と私とでは，分析視点・取上げ方がちがうと先に述べたのは，このことを指す。氏の経営学説の難解さ，高度の抽象性は，「誤解」を生みやすい理論的かつ論理的な土壌をそこに沖積させており，私の「誤解」も含めて，氏の経営学説に対しては少数の「理解者」しか，現在，いないとすれば，その一半の責は氏自身にもあるはずである。私自身は，もとより，氏の経営学説そのものを忠実に理解しようとした者では決してない。私なりの氏の経営学説に対する「理解」（「誤解」？）としての解釈

や学説研究のひとつのあり方を提示してみただけである。

なかんずく，山本氏のなす西田哲学と経営学との対峙のさせ方は，「西田哲学」の哲学的性格にからんだ氏自身の社会科学者としての職業倫理・責務にまつわる疑念を生む。山本氏は，本書『日本経営学五十年――回顧と展望』において，日本の戦時体制から敗戦にかけて生起した体験をもとに，経営学会に対し，「多かれ少なかれ，皆が戦争犠牲者であった。」〔75頁〕と述懐する。一体に，日本・日本人は戦争犠牲者でしかなかったのか，私は問いたい。私が，哲学の思想性が氏の経営学本質論の基礎理論に関する社会科学者の配慮としては，氏にはそれが欠落すると指摘したのは，この点に関係する。「建国」以来から戦時体制下にかけての満洲国は，いかなる歴史的思想的経緯をもった「国家」であったのか。満洲国にあった「建国大学」とは，何のための，また誰のための，教育機関・当地の象牙の塔であったのか。日本・日本人は明治以来の諸戦争の流れにおいて，総計的に量的質的にみて「被害者」でしかなかったと，途方もないことがいえるのであろうか。「西田哲学」そのものと戦時体制下のかかわり方に関して，私は「西田哲学」を，ここでは非難したりする論調には格段，関心はもたない。それよりも私は「西田哲学」の日本的哲学としての思想性と論理性の双方を相互関連的に問題にしたいのである。山本氏では，そのうち「思想性」を除去した「西田哲学」の論理性のみを経営哲学として高く評価するので，そもそも私のような，氏の経営学説への接近方法は「誤解」としかなりえないのであろうか。私は私のその理解方法が「誤解」であろうとなかろうと，何であろうと，この一点については既述の理由からして無頓着でいる。日本の経営学説としての山本氏の経営理論を，現時点から検討・吟味しようと試みるのであれば，それは当然の要請でありうると考える。氏の経営学説の研究方法は「論理性」においては，実質内容の構築方法として，「西田哲学」の論理依存主義そのものである。だが，その経営学説の全体の姿容は，「西田哲学」の経営学的転換でただある，という他ない。「哲学」は発展しうる学問である。現代経営学として「西田哲学」をいかに高揚し，現代的に再生しえているのか，これは私の氏の経営学説に対する最大の核心となる関心事である。そのためには「西田哲学」の論理性を超えた「思想性」・「哲学」性を，経営学説のなかに探求し，解明しようとするのは，われわれ日本にある経営学者の一研究方向として，理の必然であろう。この側面から氏の経営学説に接近・考察しようとするのが私の意図であるので，氏の「誤解」との私に対する反論的断定は，私にとっては大した意味をもたない，と考えている。

山本氏は，自身の経営学説の形成努力に際して，「西田哲学」のロゴスに経営学基礎理論の展開のための活路を見出すが，そうした氏の学問的志向での哲学的パトスが，そのロゴスと，いかにかかわっているのか，日本（人）の社会科学者として，そのパトスとロゴスの関連をどのように受止めているのか。このパトスの面からは「西田哲学」の経営哲学としての有効性・有益性がきわめられるとの，氏の表明・「自明性」のみが前面に出されるだけで，氏の経営学のロ

ゴスとのつながりは，依然，私には釈然としないものを感じる。本来，哲学においてロゴスとパトスは表裏一体，一心同体の不即不離的対向物であり，社会科学としての経営学が，何らかの形でそれを応用するにせよ，その一体不可離性はロゴスに重心がおかれるとしても，パトスを全くは捨て切れない。山本氏の経営学本質論では，その重心の移動が極限にまで到達する以前に，その関連の糸は，「西田哲学」の経営哲学としての有意義性の根拠のもつ「自明性」故に，断ち切られている。

IV

氏の断定について附言するならば，「誤解」と論難する「権威主義」的な反論ではなく,「論理性」のある氏自身の反論を，私は聞きたいと思う。氏は，私の学説研究での氏の主張に対する——この覚書で取上げている『日本経営学五十年』では——考察内容・批判的検討に関しては直接に答えずに，一方，同書他所では実質的にそれに回答を与えるやり方で，氏自身の経営学説に関する私の枢要な批判点を他者には教示しない形で，氏の反駁のみを一方的に論じるのは，学者間の対話・やりとりとして不公平(アン・フェアー)なりと私は感じる。

氏はこう述べる。

> なお，本書の最も大きな欠陥は，日本経営学50年の基礎をなしている日本経営史の分析が前提されるだけで，ほとんど全く行われていない……。経営史と経営学史との対応的展開を基礎にして経営学理を考えようとする著者の立場からして，これは最も明白な欠陥である〔序iii—iv頁〕。

上述の内実は，山本氏自身が熟知の氏の経営学説における特性の一環であるとの事実をおくとしても，私がまさに，そうした氏学説の方法・体系・内容における問題が登場することを，「西田哲学」の経営哲学性に対する氏の並々ならない評価と深く関連する核点として，すでに指摘したである。この大事な氏と私との学問的交渉の一幕をあらかじめ排除して，その点は他の学会（学界）人には不可視の状態にさせたまま，私の理解を「誤解」ときめつけるのは，私からまたいわせれば，それは事実の「歪曲」・「曲解」である。

山本氏の経営学と「西田哲学」の関連性の問題は，ひとまずおくにしても，氏に対しては，学問上の氏の直弟子が提起しているいくつかの経営学理論に関した疑問点があり〔片岡信之「山本安次郎—『本格的な経営学』の構想」，古林喜楽編著『日本経営学史』第2巻，千倉書房，昭和52年4月，117—119頁。〕，そこで論及のある諸点は，すべてすでに私が，山本氏経営学説に対して疑念を提示した範囲・実体を越えてはいない。しかもこちら——私の——の問題点の疑義に関しては，いまだ山本氏から理論的対話とみなしうる回答はなく，今の所無視があるだけである〔私の山本氏経営学説の考究については，裴 富吉『日本の経営学』,㈱河西，昭和52年5月，第3章「西田哲学と日本の経営学説」を参照のこと。〕。片岡氏が山本氏経営学説の検討の末，提起した疑問点は，大約それ以上に量的質的に，私の吟味において，しかもそれは時期的にもより早く，私が提示した批判的論点であり，山本氏の私への反論にあるような「西田哲学」依存への「誤解」という考

察方法の検討経路を通じても，片岡氏と私が共通項を基本的に有しうる疑念を提出しえているのは，どういうことであろうか。山本氏の経営学説の特質・特異性，またその問題性には,「西田哲学」との関係から探索する途が氏の学説検討という目的に十分かなうと判断した私の見方に，私はまちがいはないと考える。

山本氏は，敗戦前の東大の権威主義を批難するが，私が前述の論点に関し，氏の私に対する態度として同様な印象を払拭しえないのは至極残念な点である。また氏は，中西寅雄氏の経営学理論の「転向」を「学者的良心と勇気に対して敬意を表」〔121頁脚註〕すると感想を記している。山本氏の経営学説も日本の経営学の系譜において，同種同次元で批評の対象となりうる確固とした理論上の客観的な学派的地位を占めると認めるのに吝かでない私にとっては，先ほどの私の氏に対する経営学説理解を「誤解」と専断的にきめつけ，排斥する対応措置には，得心しがたいものを残す。

山本氏が日本の経営学界の戦争経験を「皆が戦争犠牲者」と慰撫・同情する点については，すでに私の疑念を呈示したが，これに関連して氏は，またこういう。

> 戦争経済から平和経済への転換，これにつれて思想，教育，文化，一切の価値の転換が問題となる。一つの革命といい得よう。だから，転換は復興であり，また発展である〔113頁 脚註〕。

私は，山本氏の「西田哲学」の経営哲学としての経営学方法論への活用を意図する方途を，上述引用文のことばにあるように，「転換」⟶「復興」⟶「発展」という歴史的情勢の変転に関した氏の理解による，氏の経営学説の展開を，問題にした。しかも，それは氏の「西田哲学」の解釈とからめての，氏の経営学理論を検討・吟味する作業であった。氏の「西田哲学」の思想性を論理性とは引離す方向での，経営学本質論への後者のみの理論的方法論的摂取の仕方は，上述で引用の氏自身の発言内容自体に即して十全に答えられているであろうか。これが私の氏経営学説に対する最大の疑問点である。

氏は，氏の「西田哲学」との邂逅，その解釈をこう述べている。氏が自身の経営学理論を，「確立できたのは『西田哲学』を経営哲学として学ぶことによって開眼」〔199頁 脚註〕されたからで，また「時代の進展は公私統一企業を暗示する。それが会社に対する公社にほかならない。それは尖端的な現代企業であり，その経営原理は現代の経営原理の原型をなすとも考えられる。これを問題とするとき経営学も新しい立場に立つ現代経営学になるほかないのである。西田哲学の研究によって開眼されたのであった。」〔211頁 脚註〕と氏が，自己の基本的立場，その本質論的把握を明示する時，私は次のことを考える。いう所の開眼とは，氏の経営学方法論の基盤を見出したそのきっかけとは，他者が見れば，きわめて「自明性」の色調の強い「告白」にしかすぎず，どこまでも「西田哲学」と山本氏とが，経営学理論を媒介に「禅問答」をかわす姿としてしか「理解」のしようがない対面・開眼と感じる。氏の経営学の立場の「理解」者がごく少なく，氏の経営学説の，氏自身の主唱する方向性を継承しうる「展望」が，現在にお

いて，全く望み薄なのは，社会科学としての経営学を問題にする者として，当然思い当る節ではないであろうか。

私は，相変らず氏に対しては「西田哲学」との関連にこだわり，こういう疑問を再度感じている。「現実のいろんな問題，哲学の問題を，それを原理として，解き得ることを示すということが，それが，悟りを論理的に表現することである。」〔野田又夫『哲学の三つの伝統』，筑摩書房，昭和49年，117頁，傍点は裴。〕という一大課題は，氏の経営学説の基底に控える本質観において未解決の論点として，依然，残されている，と私は考える。

ここで私は，本書評的覚書の論旨に参考となる識者の意見を引用して，山本氏経営学説の淵源理解の助けとしてみたい。

私たちは……客観的な実証と，主観的な実証の両方の接点をいかに見出すかが重要な問題とならねばならない〔弟子丸泰仙『禅と文明』，誠信書房，昭和51年，150頁。〕。禅の主体的実証性と，科学的，客観的実証性の接点の概念化の困難性がある〔同書66頁〕。現代思想史の現象は，それぞれの思想が，各自の真理をそれぞれ最も普遍性のあるものとして主張している。しかし，幾多の世界思想史的規模の大思想は，それが行われている時と場所において普遍性をもっていても，それ以外の時と場所では必ずしも通用しない場合がある〔同書29—30頁〕。

この哲学（西田哲学）の根本思想からする判断を，どうしても控えるわけにゆかないのである。もし世界の一切の矛盾を自己の内に包含する自己同一者が，「無」の性格をもつならば，その矛盾は結局において現状肯定されるのではなかろうか。悲劇をもたらさないような矛盾は，たといいかに「絶対」矛盾と呼ばれようとも，結局は現状肯定されてしまうのである。矛盾が明確に痛みを伴なう時のみ，その矛盾は現状肯定をゆるさず，現状変革へと突き動かすに至るのである〔北森嘉蔵『日本の心とキリスト教』，読売新聞社，昭和48年，144頁。〕。この哲学（西田哲学）が徹底的に平常的・日常的な世界を自己の素材として成り立っている……。「直接経験」の世界は，文字通り「直接」の経験世界であり，この世界は一切のものを包含している。一切のものを包含している世界は，あくまで平常的・日常的な世界である。……このような世界の中にどうして，変革されるべき矛盾が見られ得るであろうか。一切が「よし」として肯定されることになるのではなかろうか〔同書139頁〕。この哲学（西田哲学）が絶対矛盾の自己同一を観想することに偏して，絶対矛盾の変革に向かって動くことの弱かったことは，人を審くという意味においてではなく，この哲学のロゴスそのものの内在的問題性を指摘するという意味において，どうしても黙過することはできないのである〔同書147頁，（傍点は原文のもの，丸括弧内補足はすべて裴）〕。

山本氏経営学説の本質論・基礎理論に関し，学際的検討の方向の採用を意図している私にとって，次の西田哲学を一科学の立場から，特に精神医学の立場から考察を加える分析には，示唆深い内実を感じる。さらに，いくつか引用・参照してみよう。

西田哲学の，つまり西田幾多郎「氏の人格の心理構造の分析によって初めてその難解さが理解出来る」〔岸本鎌一「西田幾多郎」，『国文学解釈と鑑賞』，第23巻第9号1958年9月，42頁。〕。この分析によると，西田氏の心理構造は，分裂性格であり，そのなかでも最もよい過敏型に属するそうである。西田哲学の論理のすすめ方は普通のものと異なり，論証的でなく，分裂した思考を体験的に一つとして会得しているに過ぎない〔同稿49頁〕。西田哲学では，仮説のようなものを独断的に提出されるに過ぎず，いう「行為的直観」なども論証されずに，ただ体験的に超論理として出されているに過ぎない。西田哲学は，己れの心にある矛盾・対立というアンビバレンツの主体的苦悩に対する解脱哲学である。またそれは，全体にお

いて論証風でなく教説風である。というよりも，自分自身にいってきかせる自問自答であり，外に向ってパースペクティヴでなく，内に向ってそうである。西田哲学の，「場の論理」,「無の弁証法」,「行為的直観」,「絶対矛盾の自己同一」などの概念は，その論証が明確でなく，教説風に分るものだけに分るといった態度である〔同稿50—51頁〕。

西田哲学は，遺伝心理学に分裂性格者の一種独得の思考方法であるとの解釈も成立する。西田哲学は，インスピレーションとかエクスタシーによる体験的思考が中心になって，これを後から論理付けようとして，ああでもない，こうでもないといっているように思える。こうした体験的思考は実感が伴うので絶対他に譲らない。そして身近な弟子にだけ以心伝心に伝えられた趣きがある。それとともに自己愛の変形ともいうべき身近なものに対する深い愛情が，西田学派とか京都学派というものを生む契機となったのであろう〔同稿52—53頁，（傍点は裴）〕。

現在世の中には分裂性格者が多数存在すると考えられ，これらの人々は西田哲学を読むことによって，分裂した魂の苦悩から救われる人も少からずいるであろう。一般に青年は理想と現実の分裂に悩むものであり，日本敗戦直後，西田哲学が流行したのは氏の思想が分裂性格者の救済の哲学であったためと思われる〔同稿53頁〕。

私は山本氏が，心理学的に学問上の話として，分裂性格の持主かどうか，勿論知るすべはない。ただ私のこの書評的覚書での，氏に対する論評として，文脈から判断して，前述の西田哲学の心理構造面に対する精神医学的分析は，看過しえない重要な意味関連を有しうると思うだけである。

V

以上の論説をまとめて，要約的に示しておこう。

(1) 「西田哲学」の思想性と論理性のうち，後者の単独抽離での経営学本質論・方法論への活用・応用としての問題性。

(2) 日本の社会科学者として，日本の敗戦をはさんでの職業倫理・責務としての関与のあり方の問題性。思想性の問題。

(3) 「西田哲学」の経営哲学としての極度の「自明性」・「告白」性を，他者たる第三者にどう納得しうるように説明するかの問題。

(4) 経営の理論的研究，経営を経営の現実に即して研究することが，氏の経営学だとするが，何故，「日本の経営」という自己の現実的課題に対する経営の理論研究が，氏の研究体制の一環に今日まで十分になしえなかったのか。

(5) 総じて，欧米理論を，組織理論を媒介に統一・統合するのが，氏の真の「本格的な経営学」への道，「世界史的使命」との課題については，日本の社会科学者としての「主体の論理」のない「架空の構想・立論」への陥穽が待ちうけていると，評せざるをえない。

もっとも，それが日本経営学説の特殊性である——「主体の論理」なり——と局限・特定しうるなら，話は別でありうる。

山本氏が室谷賢治郎氏への私信中で述懐した，「小樽で種を蒔かれ，彦根で花を咲かせ，京都で実を結ぶ」〔室谷賢治郎「私の経営経済学四十五年の反省」，小樽商科大学『商学討究』，第19巻第4号昭和39年9月，6頁。〕，との氏の自負のほど，さてはたまた，その「実」は，いかにどこに，

再び学説発展のため，誰によりどのように蒔かれるであろうか，私が注視する，現今の日本経営学説の一系譜の動向である。

いうまでもなく，上述の(1)から(5)までは，すべて相互に関連する中味をもつ事柄である。あえてその点にはふれずに，私は山本氏に対し，私への「反論」に関して，問題提起を行い，識者の適切かつ厳正なる批判・再吟味を，巷間に仰ぎたく思う。以上の指摘は，「規範学説」とみなせる山本氏の経営学説に対して，格別に厳しく問われるべき諸点と考える次第である。山本氏の経営学説の問題性は，私との学問的交渉を越えて広く日本の学会・学界に，客観的に問われるべき課題に発展しうる価値があると，私は考える。

（べえ　ぶぎる　経営学専攻） 1977.5.31 脱稿
1977.7.15 補筆